

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18760481
 研究課題名（和文） 日本近代における博覧会開催による都市の観光化に関する研究
 研究課題名（英文） A study on the city tourism by holding exposition in Japanese modern ages
 研究代表者
 笠原 一人 (KASAHARA KAZUTO)
 京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・助教
 研究者番号：80303931

研究成果の概要：

明治期に5回にわたって開催された内国勸業博覧会や大正期と昭和期のいくつかの大規模な博覧会を事例として資料を収集し、博覧会が都市の観光化に及ぼした事例を調査した。その結果、1895年に京都で開催された第4回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭の開催時に都市の観光化が進められ、またその後の博覧会でも同様の手法が用いられたことが明らかになった。その手法は多彩で、道路整備や都市施設整備も見られるが、鉄道のネットワークの活用や観光案内書や錦絵、広告など、広義のメディアを駆使したイメージ戦略が目立つものであった。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,700,000 | 0 | 1,700,000 |
| 2007年度 | 1,200,000 | 0 | 1,200,000 |
| 2008年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,600,000 | 210,000 | 3,810,000 |

研究分野：近代都市史・近代建築史

科研費の分科・細目：建築学 ・ 建築史・意匠

キーワード：(1) 建築史・意匠 (2) 博覧会 (3) 都市 (4) 観光

1. 研究開始当初の背景

日本の近代化において、博覧会が果たした役割が大きいことは、これまで様々な研究で明らかにされてきた。例えば、吉田光邦による『万国博覧会』や『万国博覧会の研究』は博覧会研究の先駆的で代表的な文献として知られている。しかしそれは、主に技術史的な観点から、博覧会場での展示品の考察に終始しており、空間演出法や都市との関わりを考察しているわけではない。また吉見俊哉は

『博覧会の政治学』において、内国勸業博覧会を国家の啓蒙装置として捉えている。しかし、そこでは東京、京都、大阪と舞台を変えて開催された内国勸業博覧会をいずれも均質な国家の啓蒙装置と捉えており、博覧会場が置かれた場所の問題を考慮していないといえる。つまり、都市との関わりから博覧会を考察しているわけではない。また橋爪紳也は『明治の迷宮都市』において、大阪で開催された第5回内国勸業博覧会と都市の関係について論じているが、博覧会場の歴史の記述

や娯楽的装置としての博覧会についての考察が主であり、博覧会が都市の観光化に与えた影響について述べているものではない。

つまり、これまでの博覧会についての研究は、博覧会場内での展示品に関する考察や、博覧会場の空間構成についての考察に終始していた。しかし管見では、博覧会場内のみならず、博覧会場が置かれた都市もまた、大きな変化を受けた事例が確認できる。つまり、博覧会の開催が都市空間の編成や都市形成に及ぼした影響も大きいと考えられる。

近代の都市は、居住や労働のためだけに形成されたものではない。娯楽的な要素を付与しながら、都市のイメージを内外の人々に向けて演出する、観光的側面を備えている。例えば、博覧会やオリンピックなど近代的国家イベントの開催によって、国内外から多数の人々が都市を訪問する際に、施設の整備や空間的な演出、新聞、雑誌などメディアによるイメージの演出を通じて行われてきた。訪問者に向けて都市のイメージを演出し観光化するのである。したがって、それは都市の形成にも大きな影響を与えてきたと言える。

だが、従来の都市史や都市計画史研究においては、都市の観光化の過程が明らかにされたことはない。しかも都市計画史的な視点による都市史は、主に制度面に着目したものが多く、具体的な都市形成や博覧会など一過性のイベントの開催が都市形成に及ぼした影響については、考察がおろそかにされてきた。

そこで、博覧会史と都市計画史から見落とされてきた、博覧会が都市の観光化に及ぼした影響を考察するべく、本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究は、前述のような状況を背景として、近代における博覧会の開催が、都市の観光化の促進に対してどのような影響を与えたかについて、歴史的に考察を行うものである。具体的には、明治期から昭和期にかけて開催された大規模な博覧会を事例として、その開催時に都市内で行われた施設整備や事業、イベントなどに着目し、それらが都市外からの訪問客に向けて、いかなる整備や事業、空間的演出を行ったかについて調査することで、その特性を考察するものである。

博覧会開催に伴う都市の観光化は、博覧会の主催者や実行委員会によって行われるのではなく、行政や民間がそれぞれ独自に、あるいは一体となり行われることが多い。本研究では、博覧会的主催者や実行委員会による事業のみに着目するのではなく、それ以外の空間的な整備や事業、演出について可能な限り調査し、博覧会の開催に伴って生じた都市的規模の変化や影響を考察する。また前述のように、都市の観光化には、メディアを通じ

たイメージ操作にも大きな影響を与えている。博覧会の開催時には、開催都市への来訪者に向けて多くの観光案内書やポスター、錦絵などが発行され、全国的な規模で流通していた。それらには、博覧会の開催都市が、来訪者にどのような場所や施設に目を向けてもらおうとしたかが表れている。そこで、博覧会開催時に発行された観光案内書やポスター、錦絵についても可能な限り収集し、都市の観光化に際して、どのようなイメージ作りがなされたかについても考察する。

3. 研究の方法

まず、内国勸業博覧会を中心に、博覧会が都市の観光化に及ぼした事例を調査し、その関連資料を収集する。

5回にわたる内国勸業博覧会を中心に、明治から昭和戦前期にかけて日本で開催された大規模な博覧会における都市の観光化に関する調査を行う。とりわけ開催時における開催都市での新聞記事、地誌や案内記などの資料収集を進める。

資料収集にあたっては、新刊書購入の他、古書店での古書購入、図書館を通じた文献借用、国会図書館、建築学会図書館、東京都立図書館、京都府総合資料館、京都府立図書館、京都大学図書館、京都市歴史資料館、尼崎市教育委員会、その他各地図書館などでの資料閲覧などを通じて行う。

資料収集と平行して、ファイルを用いて資料整理を進める。手に入れた文献に掲載されている写真や図版のうち、本研究に関するものをデジタルデータ化する。また都市の観光化の手法と対象について、考察を行う。

調査したデータをもとに、博覧会開催の際の都市の観光化が、それぞれどのような主題のもとで、どのような形で行われたかについて考察する。例えば博覧会の主題、都市施設整備の種類と内容、事業の種類と内容、観光案内書の発行数と案内内容、錦絵の内容や構図の取り方などをそれぞれ分類し、主題とその表現との関係がどのようなものであるかについても考察する。また、すべての事例の比較考察を通じて、その時間的変化のあり方を追う。

4. 研究成果

まず資料調査を行った。当初、できる限り多くの博覧会を対象として、資料の収集を予定していたが、調査すべき博覧会の資料が予想以上に膨大で、時間的な都合からも、いくつかの博覧会に絞る形で、その中で網羅的な資料調査を行った。調査の対象としたのは、明治期に京都で開催された京都博覧会や、明治初期から5回にわたって開催された内国勸

業博覧会、また京都で開催された大正と昭和の大礼博覧会などである。加えて大正と昭和の博覧会関係の資料収集などを行った。これらについて、公式文書や博覧会場に関する資料、新聞資料、観光案内書などを収集し調査した。資料は、主に国会図書館、建築学会図書館、東京都立図書館、京都府総合資料館、京都府立図書館、京都市歴史資料館、尼崎市教育委員会、その他各地図書館で行った。

初年度は、内国勸業博覧会を中心とした資料収集を重点的に行なった。第1回から第3回までの東京で開催された内国博についても資料調査を行ったが、鉄道などの交通網が整備されていなかったせいか、他都市からの集客を進め、都市全体を積極的に観光化しようとする事業やイベントは見られなかった。観光案内書も出版はされているが、数は少ない。しかし、1895年に京都で開催された第四回内国勸業博覧会および平安遷都千百年記念祭については、観光化と呼びうる事業やイベントが複数見られ、この時発行された観光案内書、錦絵の資料を収集した。その結果、次のようなことが明らかとなった。

第4回内国勸業博覧会は平安遷都千百年記念祭と同時開催された。その際「歴史」がテーマとなり、平安京の大極殿を模した平安神宮が造営されたのみならず、京都市内や西日本の各地で古社寺が修繕され、各古社寺の宝物が展示されるなどした。

第4回内国博と記念祭は岡崎の地で開催されたが、その演出と準備は、京都の都市全体で様々な形で行なわれたことに特徴がある。第1回から第3回までの内国博は、東京の都市全体で演出がなされたわけではなく、上野の博覧会場だけを中心にしたイベントであった。記念祭と合わせての内国博であったことにも拠るが、第4回内国博が初めて都市全体を巻き込むものとなったと言える。

京都市内では、内国博と記念祭に合わせて各種交通網の整備が行なわれた。新たな道路計画に加えて、以前から予定されていた道路事業を、前倒しして実施するなどして整備を進めた。それによって京都駅と博覧会場を結ぶ路線や市内と名勝地、もしくは名勝地と名勝地を結ぶ路線の整備が進んだ。また電気鉄道が敷設され、京都駅から岡崎の博覧会場とを結ぶ路線などが営業運転された。

また京都市議事堂や歌舞練場など新しい施設も建設されたが、その一方で社寺を修繕するなどして、京都の「歴史」を可視化する試みが大規模なものであった。1871年の上知令によって社寺は領地の多くを失い、境内も荒廃が進んでいた。しかし、記念祭が京都や日本の「歴史」を内外に示すことを意図していたため、京都市や保勝会、宮内省などに補助を受けながら、社寺の修繕や再建が進められた。補助は十分ではなかった模様だが、こ

の事業をきっかけとして、明治30年には「古社寺保存法」が成立することになった。

また遺跡の調査や発掘、保存、修築も各地で行なわれた。平安京の実測や平安京大極殿遺跡、長岡京遺跡などで保存や修築が行なわれた。さらに「歴史」の演出はイベントを通じて市街地全般に及んだ。京都市内や周辺地域の社寺では、各社寺が所蔵する宝物の展覧会が開催された。多数の来場者をもたらし、これも大衆の好評を博した。こうして市内各地で、「歴史」が可視化されていくのだった。

さらに、鉄道を利用して各地から京都や西日本の各地への観光客の誘致が行われ、多数の錦絵や観光案内書が発行された。錦絵では、従来の内国勸業博覧会の際に発行されたものとは異なり、博覧会の会場のみならず、京都の名所旧跡が同時に描かれているという特徴が見られる。また観光案内書の発行数は、この年に急激に増加している。また海外でも京都への観光客誘致のキャンペーンが行われるなどしたことが明らかになった。

ここから明らかになるのは、博覧会や記念祭の会場のみならず、京都の都市全体で「歴史」をテーマとした観光化の手法である。その手法は、メディアを中心として様々なものが用いられている。これ以前に博覧会と都市の観光化を意図的に連動させたイベントは見当たらず、第4回内国勸業博覧会および平安遷都千百年記念祭は、都市の観光化をもたらした、日本における最初の博覧会であったと言える。これによって、京都は歴史観光都市として再生したのだと言える。

次年度は、1915年に京都で開催された大典記念京都博覧会と1928年に京都で開催された大礼記念京都大博覧会、および1903年に大阪で開催された第5回内国勸業博覧会の資料収集を重点的に行なった。資料調査は、国立国会図書館や京都府立総合資料館、大阪府立中之島図書館、尼崎市教育委員会などで行ない、関連する雑誌資料や商工会議所資料のほか、これらの博覧会に合わせて発行された観光案内書や錦絵などを収集した。

京都で開催された大正期と昭和期の大典(大礼)記念京都博覧会は、いずれも天皇の大典(大礼)に合わせて開催されたものである。その際、都市部では道路整備や公会堂や美術館などの公共的施設の設置が確認できた。1895年に京都で開催された平安遷都千百年記念祭および第4回内国勸業博覧会のように、強く歴史を意識した演出は見られないが、都市を装飾やイルミネーションで飾り立て、都市全体が大衆の空間として演出された点に特徴が読み取れた。

いずれも大礼の即位式が京都御所内の紫宸殿において行なわれ、大嘗祭は仙洞御所内かそのそばに造られた大嘗宮の悠紀殿と主基殿において執行された。また合わせて平安

遷都千百年記念祭および第4回内国勸業博覧会と同様、岡崎で記念博覧会が開催された。

同時に、京都市内では多くの記念事業が計画された。大典当日に天皇を迎える「行幸道路」の整備や各種の飾り付けが行なわれた。京都駅前には仮設建築物として奉祝門が造営され、四条大橋や七条橋、丸太町橋なども飾り付けられた。その他、市街地全域において各戸が引き幕や提灯を飾られた。

また、やはり観光案内書が多数発行され、博覧会のために京都を訪れた人々に、訪問すべき場所を案内し、京都の観光化を促進したと言える。

一方1903年に大阪で開催された第5回内国勸業博覧会は、現在の天王寺公園で開催された。新たな都市施設が建設され道路整備などが行われたが、大規模な都市計画的なものには至らず、道路拡幅などが主となった。また、鉄道を利用して各地から大阪や西日本の各地への観光客の誘致が行われ、多数の錦絵や観光案内書が発行された。それは、平安遷都千百年記念祭および第4回内国勸業博覧会開催時の観光化の手法を引き継ぐものであったと言える。

最終年度は、昨年度までに十分な調査ができていなかった、第4回内国勸業博覧会および平安遷都千百年紀年祭の際の、京都以外の西日本各地の都市や町での観光化についての調査を中心に行った。また可能な限りで、大正期と昭和期の博覧会と観光に関する資料収集を行った。資料調査は、国立国会図書館や京都府立総合資料館、大阪府立中之島図書館などで、関連する当時の新聞資料や各地の地誌、市史などを閲覧した。

その結果、第4回内国勸業博覧会および平安遷都千百年紀年祭開催時の地方では、京都で行われたのと同様に、古社寺の修理、古社寺での宝物展、陶磁器などの展示会、史跡名勝への道路や茶店の整備などが主であり、大規模開発や都市計画的な改編は見られなかった。しかしそれらは、京都での博覧会と紀年祭に合わせて整備されたものであり、鉄道による集客を前提とした事業である。つまり1895年には、京都のみならず各地で、商工会議所などが中心となって、自主的に観光化が進められたことが明らかになった。

また、昨年度までに収集した第4回内国博覧会および紀年祭開催時に発行された観光案内書の分析を試みた。『京都出版史』によれば京都の観光案内書の出版は、明治26年が4冊、明治27年が4冊、明治28年が33冊であり、第4回内国博覧会および紀年祭開催に合わせて観光案内書の発行が増えている。それらの記述内容を考察すると、日本語の案内書は、京都市の中央部や東部を始点として、北東部、北部、北西部、西部、南西部、南部、南東部と、大きく左回りに案内が進む傾向が強い。

英語の案内書は、中央部から始まるが、その後の記述がバラバラか、西部から右回りで北東部へ向かう傾向が見られた。これは、国内向けの案内書については、御所から始まり東山近辺を観光の目玉と捉えていることが伺える。また外国の観光客への案内方法が、国内向けとは異なっている。その意味は十分に検討できていないが、京都あるいは日本の「内」と「外」で京都への関心の持ち方にズレが見られることが明らかになった。

この研究を通じて、博覧会と都市の観光化が密接である例が複数確認できた。その手法は、道路整備や新たな施設の整備も挙げられるが、それ以上に、展覧会や展示会などの開催や観光案内書の発行などメディアを通じたものが目立っていた。メディアを駆使することで都市のイメージを創出し演出し、それを観光客が消費する。それは現在の都市の観光化の手法と同じである。こうした手法が、博覧会の開催とともに繰り返し使われることで、都市の観光化が進んだと言える。

博覧会に関する資料は膨大であるため、今回は限界があったが、今後の課題として、より多くの博覧会の事例の調査が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

①笠原一人、博覧会の都市空間—歴史観光都市京都の誕生—、美術フォーラム、審査無VOL.15、2007、pp.84-87

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 3 件)

①川上貢・石田潤一郎・中川理・笠原一人ほか7名、京都の近代化遺産、淡交社、2007年、238頁

②笠原一人・並木誠士・中川理、他、EXHIBITION尼崎コレクション—洛中洛外図から大阪万博まで—、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2007、32頁

③笠原一人・中川理・並木誠士、他、東山／京都風景論、昭和堂、2006年、182頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笠原 一人 (KASAHARA KAZUTO)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・助教
研究者番号：80303931

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：